第５６回 埼玉文芸賞
受賞作品が決まりました！

埼玉県・埼玉県教育委員会では、県内における文芸活動の振興を図るため、昭和４４年に埼玉文芸賞を創設し、文芸各部門の創作活動において特に優れた作品を表彰しています。

第５６回となる今回も、幅広い年齢層からの応募があり、小説・戯曲、文芸評論・エッセイ・伝記、児童文学、詩、短歌、俳句、川柳の部門に合計４３０点の作品が寄せられました。

これらの作品について、２月７日（金）さいたま文学館で開催した選考委員会の推薦に基づき、埼玉文芸賞１点　、同準賞１２点、同奨励賞３点を下記のとおり決定しました。

次ページ以降に、埼玉県ホームページの県政ニュースで発表した選評を掲載します。

埼　玉　文　芸　賞

詩部門	『常夜灯』	原　島　里　枝

埼玉文芸賞準賞

小説・戯曲部門	「呆禅」	山　川　草　也
	「てのひらをかえす」	長谷川　未　帆
文芸評論 エッセイ・伝記部門	『声』	梅　宮　創　造
	「強いられた人生を生きて」	佐　藤　咲　子
児童文学部門	「ふたごのミルとルミ」	山　根　三　穂
	「おばあちゃんちの座敷わらし」	せやざき　やすこ
短歌部門	『フイルム』	丸　地　卓　也
	『月曜バッグ』	斎　藤　千　代
俳句部門	『煙草』	田　口　　武
	『風の楯』	山　下　由理子
川柳部門	「思いの丈」	島　田　まさえ
	「老いの茫茫」	柳　沢　旭　日

埼玉文芸賞奨励賞

詩部門	「口を縫って脳で言う」	樋　口　綾　花
短歌部門	「ドラマチックに」	野　澤　美　羽
俳句部門	「今日の月」	齊　藤　　栞

※「　」は生原稿・雑誌掲載作品、『　』は単行本

選　考　委　員

小説・戯曲部門	相澤　与剛	中村　邦生	山名美和子
文芸評論･エッセイ･伝記部門	加藤有希子	佐藤　健一	杉浦　　晋
児童文学部門	金治　直美	櫻沢恵美子	森埜こみち
詩部門	川中子義勝	北岡　淳子	野村喜和夫
短歌部門	沖　ななも	外塚　　喬	内藤　　明
俳句部門	尾堤　輝義	久下　晴美	田口　紅子
川柳部門	酒井　青二	相良　敬泉	西松　忠義

氏名は部門別５０音順（敬称略）

選　　評

【小説・戯曲部門】

第５６回埼玉文芸賞小説・戯曲部門は選考に議論を重ねたが受賞に届く作品はなく、準賞２作、佳作１作を選出した。準賞として山川草也氏の「呆禅」、長谷川未帆氏の「てのひらをかえす」を選び、川原和三氏の「辻屋の長者」を佳作とした。

応募作品数は７７点と昨年度よりやや減少。６０歳代から７０歳代が半数近くを占め、次いで５０歳代、８０歳代が健闘。毎年の応募者もあり、今後も意欲を以て応募に挑むよう期待したい。

準賞２作。「呆禅」定年後、妻に先立たれた羽賀了輔は空しさを埋めようと秩父遍路に発つ。やがて厳しい修行を経て僧侶の資格を取得し秩父の寺の住職となる。人びとの交流のあたたかさ、人生の再出発がスピード感のある文章で描かれる。「てのひらをかえす」野球のドラフト会議、プロ野球選手のたどる光と影を人の性を洞察する視線で描いていく。

佳作「辻屋の長者」江戸時代の武蔵が舞台。豪商の跡目争いの始末を銭で引き受ける那須の行者を冷徹に描く。

（山名美和子）

【文芸評論・エッセイ・伝記部門】

準賞２編を紹介する。梅宮創造『声』は大学院生時代の出来事を語ったエッセイ。指導教授の小沼丹に連れられて井伏鱒二宅を訪ねたところ、文芸誌「海」編集長の塙嘉彦が先客でいたという。何とも羨むべき顔ぶれである。今や名うてのエッセイスト梅宮氏の未だ初々しい当時の話である。単行本『千無のまなび　小沼丹氏にふれて』所収の巻頭作。この書名と同題の章も併せ二部構成の作品として応募しなかったのはなぜだろうか。

自伝エッセイ「強いられた人生を生きて」の佐藤咲子は、岩手の山峡の村で両親を殺害され、犯罪被害者遺族として「強いられた人生」を生きてきたという。猟銃による強盗殺人の事件当時、筆者は高１、兄が高３で、未成年の被害者遺族の後見制度などなかった時代である。ヨハネの「あなたを孤児にしない」という言葉に支えられたという。今は狭山市に住み、自らの体験を語る講演および社会活動を通して多くの「助力者」を得ている。外に佳作５編を選出した。

（佐藤　健一）

【児童文学部門】

応募作品数は３３編。埼玉文芸賞は選出できなかったが、今年も内容が充実し、有意義な選考になった。

準賞１席は山根三穂氏の「ふたごのミルとルミ」。積極的な女の子ルミと慎重派の男の子ミルがバラまつりに行くと……。作者は主人公ふたりを生き生きと書き分けながら、夢あるストーリーを展開する。さあ、ふたりは出会ったペンギンを救うことができるのか……。

準賞２席は、せやざきやすこ氏の「おばあちゃんちの座敷わらし」。おばあちゃんの家に滞在するメグミの前に、アーちゃんと名のる謎めいた女の子が現れて……。主人公が知らなかった家族の歴史が胸に残る作品。

佳作１席は川田八重子「ヒマラヤの少女ミラ」、２席は米熱「きらわれもの賛歌」（詩）、３席は金子みよこ「とおかんやのお月さま」、４席は和子透「海が父ちゃん」、５席は秋沢楓「紙のやりとり」、６席は早瑚みなお「彼岸花の根」となった。

（櫻沢恵美子）

【詩部門】

２月７日に行われた選考委員会でわれわれは、原島里枝『常夜灯』を埼玉文芸賞にふさわしい詩集であると認め、贈賞することにした。また佳作には玄原冬子『福音』、橋本俊幸『青空に星は見えない』、ゐしもりみづゑ『淼（びょう）』、松井ひろか「半夏生」、野澤舞花「日々から生まれたことば」、大槻えく子「赤い自我像」、奨励賞には樋口綾花「口を縫って脳で言う」をそれぞれ選んだ。

『常夜灯』は非常に意欲的な詩集である。全身全霊で言語を運用し、詩的想像力を羽ばたかせようとする作者の姿勢が、そのまま作品の形となってこちらにも伝わってくるようだ。まずそのことを評価したい。内容的には、闇夜に「あなた」を希求する「私」の孤独が、ときに宇宙大の規模を得て広がるが、「私」はそのとき、すでに「あなた」の変容でもある。詩人はその機微を美しく織り上げたと言えるだろう。惜しくも佳作となった『福音』は、完成度で群を抜き、最後まで賞を争った。

（野村喜和夫）

【短歌部門】

埼玉文芸賞はなく、準賞は丸地卓也氏の『フイルム』と斎藤千代氏の『月曜バッグ』に決定した。

丸地氏は医療ソーシャルワーカー。嘱目としては日常を詠っているのだが、視点が独特で、どきりとさせられる新鮮さがある。現代という時代の持っている不可思議・不合理が鋭い刃物で切り取ったような断面を見せる。言葉の扱いが柔軟で心地よい。

内視鏡下手術用ロボットダ・ヴィンチはかしかし歩き出すかもしれぬ

バンクシーの絵の落札で起動する裁断機こそかなしき玩具

斎藤氏は小学校の講師。月曜バッグとは小学生が体操着や上履きなどを持って行く軽くて大きいバッグのこと。小学校の生活、子どもたちとの交わりが柔らかいタッチで描かれている。コロナの時期を含み、通常ではない状況が歌集の変化にもなっている。

担任の悪口を平気で言える場所　図工室には守秘義務がある

もうひとつの選ばなかった方の人生を密かに恋うる夕暮れの杜

（沖　ななも）

【俳句部門】

応募作品数は昨年より６編減り８９編であった。１０代から９０代まで幅広い世代からの応募があり、単行本８編、原稿等８１編が集まった。

選考委員の尾堤輝義、田口紅子、久下晴美が全作品に目を通し、２月７日の選考会議で各自推薦する作品を俎上に載せた。評の一致をみた作品もあり、更に検討を重ねた結果、準賞２名、奨励賞１名を決定した。

準賞は田口武『煙草』（単行本）と山下由理子『風の楯』（単行本）。

ぶらんこの淋しいときの揺らし方　　武

踝のふたつに夏の来たりけり　　由理子

今回の候補作は拮抗した力量で、埼玉文芸賞を選出できなかった。また、準賞と僅差であるが、佳作６名（句集３名、原稿３名）を選出した。４０代も２名含まれる。

奨励賞は齊藤栞「今日の月」に決定した。瑞瑞しい感性溢れた作品で今後に期待したい。

今回２０代の応募が無かった。若年層からの応募が増えることを切に願っている。

（久下（くげ）　晴美（はるみ））

【川柳部門】

今年度の応募総数は５２点。３委員により準賞２名、佳作６名を選出した。

準賞１席は島田まさえ氏の「思いの丈」。自然を世の中を客観的に表現しており、色々な物への興味を持つ行動範囲の広さを感ずる。

災害は時を選ばずやって来る

準賞２席は柳沢旭日氏の「老いの茫茫」。自らの心象を余すことなく、過去、現在、未来へ向けての思いを表現している。

残る日を感謝で生きるありがとう

佳作には鎌倉八郎氏「鴨の味」、木村公平氏「米寿のつぶやき」、ゆみ氏「命」、佐藤京子氏「弱虫」、榎本祐子氏「日々好日」、藤井いろり氏「日々想う」の６名を選出した。

この度、応募された方々の作品をじっくり読み返して、それぞれの個性ある作品に順位を付ける忍びなさを感じた。全ての方を選んであげたい思いだが入選の数も決まっているので惜しみながらも選ぶに至った。

（相良（さがら）　敬泉（けいせん））

贈呈式の開催について

第５６回埼玉文芸賞贈呈式につきましては、３月１５日（土）１３時３０分から桶川市民ホール１階プチホール（さいたま文学館併設）にて開催いたします。

令和に入り会場や形式を変更していますので、御来館の際はお気をつけください。

選考委員による部門別講評につきましては、３月中旬に当館ＨＰにて公開し書面配布もいたします。

また、第５６回埼玉文芸賞受賞作品は、６月末刊行予定の「文芸埼玉」第１１３号に掲載されます。刊行後は、県内の公立図書館や公民館等（※）にお送りする他、当館２階図書室での閲覧と１階受付での販売を予定しております。詳細は下記へお問い合わせください。

※閲覧を御希望の際は、目的の施設にあらかじめ電話等で御確認の上、お訪ねください。

〇お問合せ先　　さいたま文学館　　〒３６３－００２２　桶川市若宮１－５－９
電話　０４８－７８９－１５１５